小松食の歳時記

歯応えが嬉しい郷土料理「かっちり豆」

大豆を醤油、米飴や砂糖などで甘辛く、硬く煮た料理が「かっちり豆」。各家庭によって味付けは異なり、醤油の代わりに塩を使ったりもする。大豆の他に昆布やニンジンを入れたり、山手の家ではタニシを入れたり、海手ではつぶ貝を入れたりもする。

日持ちも良く、白山麓では正月料理として、一年間まめにそくさい（元気）で過ごせますようにとの願いを込めて食べる。

作り方は、大豆を水からとろ火でコトコトと数時間煮詰める。火が強すぎると豆の皮がむけたり、豆が割れたりするので注意が必要。水分が少なくなってきたら砂糖などを入れてさらに煮詰める。豆が元の大きさに戻るまで煮詰めたら完成。

柔らかい煮豆と違い、かっちりとした歯応えが嬉しく、箸が止まらなくなる。

第一六回米・食味分析鑑定コンクール国際大会で小松市産のお米が世界一に認定！

来年は小松市で第一七回大会を開催

国際総合部門で金賞を受賞した護国寺生産グループの竹村敏則氏。

環境王国部門で特別優秀賞を受賞した西太兵衛氏。

平成二十六年十一月二十三日～二十四日に青森県田舎館村で行われた、規模、歴史共に国内外最大級のお米のコンクール、第一六回米・食味分析鑑定コンクール国際大会（主催／米・食味鑑定士協会、青森県田舎館村）において、小松市から出品したお米が、コンクールの最高栄誉の賞である国際総合部門で金賞を受賞した。

受賞したのは、小松市五国寺町の護国寺生産グループで、コンクールには四、三六九検体が出品され、一七のお米が金賞に選ばれた。護国寺生産グループのお米は、平成二十六年で世界一おいしいお米のひとつとして認められたこととなり、小松市からは初の受賞となった。

審査風景（青森県田舎館村民体育館）

また、環境王国認定自治体の中から選ばれる環境王国部門においても、小松市から出品した西太兵衛（にしたへい）氏（高堂町）のお米が、特別優秀賞を受賞。西氏は平成二十四年度にも同じく環境王国部門特別優秀賞を受賞しており、二年ぶりの受賞となった。

平成二十七年秋には、同コンクールの第一七回大会を小松市で開催することが決定しており、小松市では、今回の金賞受賞を契機として小松市産米の連続金賞受賞を目指して美味しいお米づくりを支援することで、「環境王国」に認定されている小松が持つ豊かな自然、農業資源に磨きをかけて、未来の子どもたちに残していきたいと考えている。

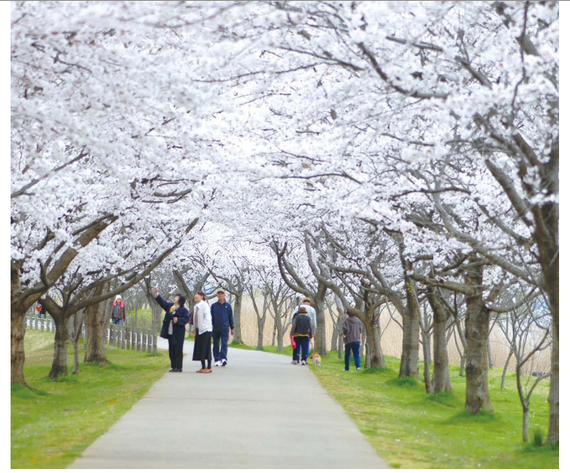
太古のままの姿を残す湖。木場潟が小松にもたらしてくれたもの。

来年の五月に全国植樹祭が開催される小松市の木場潟。四季折々、様々な表情を見せてくれる湖水周辺の自然は市民の健康と癒やしの場所である。

木場潟は柴山潟、今江潟とともに加賀三湖と呼ばれ、県内で唯一干拓されずに自然のままの姿を残しており、その水郷風景は「いしかわの自然百景」にも選ばれている。特に潟越しに見る霊峰白山の姿は絶景で、白山のビューポイントとしても有名である。

多くの市民、県民に愛されている木場潟公園は、昭和五十七年に県営公園として開園。面積は四九・二ヘクタール。周辺の田園風景と調和するように整備され、多くの野鳥や水生植物が生息している。

潟の周囲には、四つの園地が整備され一周六・四キロメートルの園路が結び、ウオーキングやジョギングのメッカとも



木場潟は桜の名所としても知られる。

春の木場潟と白山。手前は JA 小松市の特別栽培米「エコ育ち」の水田。

木場潟の園路６・４キロで１万人が手をつないで木場潟を囲む「スマイル木場潟」の様子。（平成 26 年 5 月 18 日）（写真／木田智滋）

「カヌーの聖地」としての知名度も高い木場潟。（写真／木田智滋）

なっている。またカヌー競技のナショナルトレーニングセンターに指定されており、「カヌーの聖地」とも呼ばれている。

その木場潟公園を主会場として、平成二十七年五月十七日（日）、第六六回全国植樹祭いしかわ二〇一五が開催される。

全国植樹祭は、豊かな国土の基盤である森林・緑に対する国民的理解を深めるため、毎年春季に天皇皇后両陛下ご臨席のもと、国土緑化推進機構と開催地都道府県の共催により行う国土緑化運動の中心的な行事。この全国植樹祭は、来春の北陸新幹線開通後の最初の大型イベントとなるため、石川県と小松市では、開催一年前となる今年五月から様々なイベントを開催するなどPR活動を展開している。

第六六回全国植樹祭プレイベントを開催

今年の五月十八日に、開催一年前イベントとして全国植樹祭プレイベントが木場潟公園中央園地で開催された。小松市の緑の少年団代表から苗木と花の引き渡しが行われ、谷本石川県知事や和田小松市長らが緑の少年団と一緒にアテやトチノキなどの記念植樹を行った。

北園地と西園地間の園路沿いでは、小松市出身の華道家野村天圭衣（てんけい）さんが、木場潟と白山の眺望をプレゼントする「ギフトボックス」をテーマに、木場潟を「花器」に見立てた巨大な生け花オブジェを制作。多くの来場者の注目を集めた。

その他、苗木の無料配布や、様々なステージアトラクションの他、親子らが六・四キロメートルの園路を巡る「白山眺望ウオーク」、一万人が手をつないで木場潟を囲む「スマイル木場潟」などが行われた。

八月二十三日には、応援イベントとして園路に並べられた約七千個のろうそくを眺めながらウオーキングする「木場潟キャンドルナイトウオーキング」も開催され、全国植樹祭のPRが行われた。

また植樹祭に向けて、自宅や学校、企業などでコナラやクヌギなどのどんぐりを播いて育ててもらったり、苗木を育ててもらう「どんぐり・苗木のホームステイ」活動も石川県全域で行われている。

緑の少年団と一緒に記念植樹する和田小松市長。（平成 26 年 5 月 18 日）

どんぐり・苗木のホームステイの様子。（小松市の稚松小学校）

応援イベント「木場潟キャンドルナイトウオーキング」（平成 26 年 8 月 23 日）

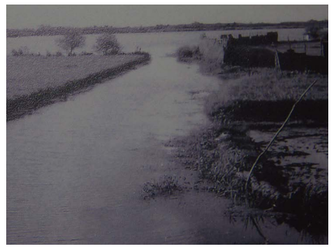
華道家野村天圭衣（てんけい）さんの巨大生花オブジェ。（平成 26 年 5 月 18 日）（写真／木田智滋）

小松の人々の生活を支えてきた木場潟

古代において木場潟は、潟や入り江のほとりに住む人々の魚貝などの採取の場として、その後は内陸の大杉谷の木材を舟で小松、安宅の消費地へ運ぶ木材の集散地として、常に小松の人々の生活を支えてきた。

「木場」の名は、木材の集積地であったことに由来する。

小松市の木場潟に復元された舟小屋。漁業や農業のほか、人や物資の輸送に舟は欠かせない存在で、木場潟にはその舟を係留するための舟小屋が点在していた。



昭和30年頃の木場木揚げ場（「小松教区における東本願寺再建の歩み」より

昭和の中頃まで木場潟周辺のほとんどの農家は舟を持ち、木場潟に入り込んでいた無数の水路を農作物の運搬や人の移動に利用していた。木場町の辺りは遠浅で砂浜があり、木場潟は泳ぐことができるほど水がきれいだった。農家は貴重なタンパク源として鮒や鯉、ナマズや鰻などを捕っていた。それが昭和三十四年に農地の区画整理が始まり、水路が埋め立てられたことで木場潟の環境は大きく変化した。

一時は水質悪化が大きな問題となっていたが、様々な水質浄化の取組みが行われ、その水質は少しずつ改善してきており、水草も復活してきている。

東本願寺の再建と木場潟

明治時代、火災で焼失した東本願寺の再建が行われた時、吉崎御坊に蓮如上人が来訪して以来、真宗王国と言われた加賀地域の門徒たちが自慢の巨木を寄進した。小松の大杉、日用、丸山、西俣、赤瀬などのヒノキ、ケヤキ、マツ、スギが切り出され、木遣り歌を響かせながら人力で木場潟に集め、水運で安宅港へと運んだ。大木を山中から人力のみで引っ張る作業は想像を絶する過酷なもので住民総出の大仕事であった。

東本願寺　御影堂（明治28年竣工）

「加賀献木木遣り保存会」が再現した「加賀献木木遣り」。

丸山村の献木根株（直径約120cm）『小松教区における東本願寺再建の歩み』より

木場潟の存在が生み出した古代・小松の高度で豊かな木の文化

縄文時代の早期、今から一万年前、木場潟、柴山潟、今江潟の加賀三湖はまだ海の中にあり、その後、海退が進んで弥生時代のおよそ二千年前には加賀三湖が形成されたと言われている。初期は一つの入江だったものが、木場潟、柴山潟、今江潟の順で形成された。

現在のJR小松駅東側で発見された八日市地方遺跡は北陸を代表する弥生時代中期の大規模集落遺跡で、出土した大量の土器や石製品、木製品のうち一〇二〇点が国の重要文化財に指定されている。

日本海側の重要な古代遺跡は海に面したラグーン（潟）の側にあり、その例にもれず、八日市地方遺跡は当時は今のJR小松駅付近まで広がっていた木場潟（当時は加賀三湖として一体）の中に半島のように突き出すように位置していた。

集落が大規模になると人口が爆発的に増えるため、生活に必要な様々な物資の流通のために潟の存在はとても重要な要素であった。

八日市地方遺跡から出土した木製品に使われた木の種類は八〇種類以上に上り、用途に応じて木を使い分けていたことがわかっている。木材は建物にも使われていて、大きな木材は木場潟を利用して能美丘陵から運んでいたと考えられている。

当時は石の道具で木を削っていたが、木を選び、木目を読んで加工する技術は現在の木工の人間国宝も驚くほど非常に高度なものである。

弥生時代において、現在の山陰地方から北陸にかけての日本海側の地域は先進的な木工技術を有していて、八日市地方遺跡はその東端にあたり、八日市地方遺跡の存在は、東日本への文化の伝播に非常に重要な役割を担ったと言われている。

飛鳥時代以降には、木場潟のほとりで渡来人を中心とした工人集落が誕生し、木場潟対岸の丘陵地は日本海側屈指の製陶コンビナートとなる。

弥生時代以降、高度な技術を持った古代史上重要な地域となったのは、木場潟と梯川という水の恵み、豊富な森林資源、白山というランドマーク、そして碧玉などの豊かな地下資源の産出地であったことが大きい。

やがて、中世になり、八日市地方遺跡から約五キロメートル東に加賀国の国府が置かれることになったのも、木場潟と梯川、そして白山の存在が大きく関係していると考えられる。

木場潟無くしては、今につながる小松はあり得なかったのである。

魚形木製品（長さ92cm）

国の重要文化財指定品の一部／撮影 小川忠博

現在の木場潟。弥生時代には木場潟の北端はこれよりさらに北、JR小松駅付近まで広がっていた。

●八日市地方遺跡の出土品は小松市埋蔵文化財センターで見学いただけます。
〒923-0075
石川県小松市原町ト77-8
TEL:0761-47-5713

※全国植樹祭記念公開展
「こまつ原始の植生と樹木利用」
3/19（木）～6/21（日）を予定。

白山信仰と小松

日本が貴族社会から武家社会へと移り変わるきっかけとなった舞台

小松市千代町から見た白山の夕景。手前の小高い山の山頂や山麓に中宮八院が点在していた。

白山がもたらしてくれた恵み

石川、福井、岐阜の三県にまたがってそびえる白山は、富士山、立山とともに日本三霊山、三名山に数えられる山。

小松市の平野部からは、夏の一時期を除いて一年を通して雪を頂いた白山を遠望できる。その名前のとおり白く美しい山の姿は、現代を生きる小松人にとってもそうであるように、太古の時代に生活を営んだ縄文人たちにも、気高く、神秘的なものを感じさせたに違いない。

『古今和歌集』で紀貫之が「思ひやる　越の白山　知らねども　ひと夜も夢に　こえぬ夜ぞなき」と詠い、藤原兼輔は「きみがゆく　越の白山　知らねども　ゆきのまにまに　あとは尋ねむ」と詠っており、白山が古くから日本の名山として知られていたことがわかる。

小松市内の小中学校のほとんどの校歌にも登場する「白山」は、地域の象徴である。

白山の雪解け水は伏流水となって田畑を潤し、また白山に連なる山々がこの地に多湿の気候条件をもたらし、その湿度が絹織物にも適していたことから、小松は古くから絹織物の産地として栄えた。またその湿度はこの地域を苔の生育に適した場所にしてくれているのである。

白山信仰の変遷と中宮八院の成立

いにしえの小松人にとって、遥かに仰ぎ見るこの秀麗な白山は、先祖の魂が宿る聖域であり、また農耕や日々の生活に必要な水をもたらしてくれる神聖な存在であった。漁業を営むものや日本海を航海する船人にとっては海上からの目印とされ、航海や漁業の守護神としても崇められていた。

そのような自然崇拝的な白山への信仰は、養老元年（七一七）に泰澄大師が白山を修験の地として開いたことから神仏習合の山岳信仰の対象と変化して行く。

平安時代、白山登拝の起点として馬場が加賀、越前、美濃に設けられた。加賀の馬場では「本宮四社」の白山本宮（現在の白山比咩神社）・金劔宮・三宮・岩本宮と、「中宮三社」の中宮・佐羅宮・別宮が合わせて「白山七社」と呼ばれるようになり、加賀禅定道の中心的な存在となった。やがて白山七社とその末社は比叡山延暦寺の末寺となり、その運営体制を固めて行った。

平安時代の後期、日本海の安宅に流れ込む梯川の上流域、国府の東から南にかけての丘陵地帯の軽海郷に中宮八院と呼ばれる寺院群が成立した。中宮八院とは、護国寺、昌隆寺、松谷寺、蓮華寺、善興寺、長寛寺、隆明寺、湧泉寺を指し、白山中宮勢力の末寺として位置づけられていた。

中宮八院は、平野部の集落に住む人々へ白山信仰を布教するためと、白山参拝へ赴く基点となる寺であり、白山へと向かう道沿いや川沿いにある小高い山の上やその麓付近に点在していたと考えられていて、遊泉寺や立明寺、正蓮寺、五国寺の地名は中宮八院の名が地名として残ったものである。

日本の歴史の転換のきっかけとなった「安元事件」の舞台となった小松

安元二年（一一七六）、中宮八院の一つ、湧泉寺を加賀守藤原師高の弟で目代の師経が焼き払うという事件が起こった。世に言う「安元事件」（白山事件、白山騒動とも呼ばれる）である。白山宗徒側は延暦寺の力を借りて、国司と目代の処分を求め日吉・早松両社の神輿を担いで内裏に押し寄せた。後白河法皇が平清盛の嫡男、重盛に内裏を固めさせたところ、重盛の郎党が多くの衆徒を射殺し、神輿にも矢が当たった。衆徒は担いできた神輿を路上に捨てて、比叡山に一目散に逃げ帰った。

延暦寺は師経の罷免を後白河法皇に要求することになったことから事態は比叡山VS法皇という対立に変化して行く。その背景には、藤原師高・師経兄弟の父で後白河法皇の近臣・西光と平清盛との権力争いもあった。

法皇は比叡山の要求を受け入れ、師経を配流とした。この時、法皇が、「賀茂の水、雙六の賽、山法師、是ぞわが心にかなわぬもの」と嘆いたことは有名である。

この安元事件の翌年の六月、いわゆる鹿ヶ谷事件が起こった。西光は斬首となり、師高は清盛の家人に討たれ、政局は平氏政権、武家政権の誕生に向けて急速に動き出すこととなった。

中宮勢力を継承した那谷寺

元禄二年（一六八九）八月、『奥の細道』の旅路で那谷寺に参詣した松尾芭蕉は、その境内に佇み、「石山の石より白し秋の風」の句を詠んだ。那谷寺は平安時代末期以降、白山三ケ寺の一つとして白山中宮の末寺であった。

安元事件より時代が下り、南北朝時代。中宮八院は南朝に味方したため、八院は没落したが、中宮系寺社の中で那谷寺だけが北朝・室町幕府側に属していたため、那谷寺は没落した八院の遺産を継承し、中宮系寺社のうち、唯一勢力を保ち、南加賀の白山系寺院の代表的存在として今日まで至っている。

小松市 那谷寺　本堂大非閣（重要文化財）

［参考］
白山本宮神社史編纂委員会『図説 白山信仰』北國新聞社出版局
白山総合学術書編集委員会『白山―自然と文化―』北國新聞社
小松市教育委員会『加賀国府と中宮八院』石川県小松市教育委員会埋蔵文化財調査室

「こまつもんブランド」に注目！

地元農産物の利用拡大と環境王国こまつのイメージアップの取組み

【こまつもんゴールド】マイルドトマトカレー（JA小松市）、大麦バウム（ル ミュゼ ドゥ アッシュ）、六さん健康おにぎり（道の駅こまつ木場潟）、純米自然酒　蛍舞（東酒造）、農家まりちゃんの手作りトマトジャム（まるしょう）、小松うどん今昔綸子（中石食品工業）
【おみやげこまつもん★一番星】こまつのじわもんベジおやつ　にんじんチーズケーキ（S.O.T. cafe）、大麦を使ったにんじんのスープ（JA小松市）、神泉カブッキー本醸造（東酒造）、シャンデュオルジュ（あんずの木）
※こまつもんブランド認定商品についてのお問い合せは、環境王国こまつ推進本部 TEL：0761-24-8078 まで。

こまつもんブランド認定ロゴマーク。

小松市では、環境王国こまつの「安全・安心・おいしい」の農産物を活かして開発された商品を「こまつもんブランド」として認定することで、地元農産物の利用拡大と環境王国こまつのイメージアップを目指している。

認定商品は平成二十六年十一月末現在で、全六六品に上る。

今年の九月二十九日には、こまつもんブランド認定審査会がその中から特に優れた商品を「こまつもんゴールド」として認定した。また、同じ日に、「おみやげこまつもんコンテスト」の審査も行われ、小松市産の農産物を使用したおみやげものとして、優れていると評価された四品が「おみやげこまつもん★一番星」として表彰された。

こまつもんブランドが果たすべき役割

フードアナリスト
里井真由美さん

こまつもんブランドの取組みは、「食」を通じて地域や人の繋がりを強めてくれる、素晴らしい企画です。出品された皆様の店舗へ伺っておりますが、そこでの皆さまの熱意はすごいと改めて感じています。「地産地消」を重んじ、皆が「こまつらしさ×おいしさ」を追求していくことで街全体が活性化されていくのだなと実感しています。

おみやげこまつもんの審査においては、「こまつらしさ」はもちろん、おみやげとして持ち帰りたいとおもわれるものであるかが重要です。おいしさはもちろん、今後は「パッケージ」や「ネーミング」「アピール度の高いPOP」なども考慮された品が増えることを期待しています。

おみやげの強みの1つは、そのもの自体が人の手に渡り、良さを拡散できる事です。商品を作る方、デザインを考える方などが繋がりチームとなりアイディアを出し合って行くことも大事ですし、誰からも愛される商品を作るには、若い方から高齢者の方まで様々な分野の方々が一丸となり、また官民が一体になり強化していくことがとても重要で、その中で小松が地方創生の見本となるよう、私も一緒に取り組んで行きたいと思っています。

こまつもんブランド認定審査会会長の里井真由美さん。（1級フードアナリスト、フードライター）

スーパーパティシエも絶賛した小松産大麦ピューレの魅力

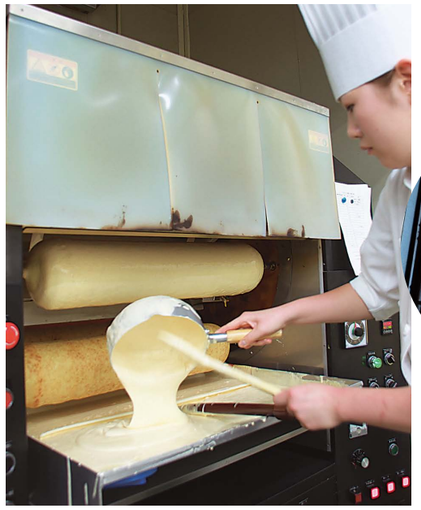
「こまつもんゴールド」に認定された「大麦バウム」を製造する辻口博啓さんのパティスリー&カフェ、ル ミュゼ ドゥ アッシュ KANAZAWA。辻口さんは自身のツイッターで「石川県にこんな素晴らしい大麦があることが奇跡でした」と絶賛されているが、今回は、同店のシェフパティシエ、永田欽哉氏に、小松市産大麦を使った今回の商品について語ってもらった。

シェフパティシエ
永田欽哉さん

これまで洋菓子業界では大麦を素材として使うことはほとんど無かったのですが、小松市さんからご提案いただき、辻口と大麦ピューレの特性を聞かせていただいて、洋菓子に使ったらすごいものができるのではという予想はしていました。とにかく初めて使う素材だったので実際に商品になるまでの約半年間で通常の倍以上の四〇回ほど試作を重ねました。小麦や米粉なら今までの経験とデータの蓄積がありますが、初めて使う大麦では仕上がりのソフトさと固形力のギリギリの線を見極めるのに時間がかかりました。最終的にはソフトな口当たりが特徴の良い商品に仕上がったと思います。大麦がバターや卵の風味を邪魔しないのも良いですね。パッケージにもこだわり、大麦の豊かな穂を連想させる高級感のあるゴールドに仕上げました。企業様から贈り物に使いたいと三〇〇個、四〇〇個単位でのご注文もいただいています。

辻口は日頃からスイーツを通して地域や、地域の素材を広く知ってもらわなければいけないと言っております。今回、弊社のバームクーヘンに小松産の大麦を使わせていただいたことで、小松の大麦、石川の魅力を日本全国、そして世界へと広く発信して行けたらと思っています。

ル ミュゼ ドゥ アッシュ KANAZAWA のシェフパティシエ、永田欽哉さん。



大麦バウムはル ミュゼ ドゥ アッシュ KANAZAWA のアトリエで専任のパティシエがつきっきりで丁寧に焼き上げられる。

華やかな町人文化が残したもの

加賀藩主・前田利常の産業振興や文化奨励によって花開いた小松の町人文化。町民らが蓄えた財力と職人たちの技は、豪華絢爛な曳山子供歌舞伎を生み出しました。二〇一六年に「曳山二五〇年」を迎える小松市中心部では、住民と市が連携しながら町人文化を伝える町家の保存や活用をすすめています。今回は町家をキーワードに往時の面影をたどり、小松の街の今を訪ねます。

とら屋陶器店 (→ P11) の二階座敷。60年前の朱壁は、今も艶やかな色彩を放っています。

小松の中心市街地には、およそ一一〇〇軒の町家が残ります。昭和五年と七年の二度の大火で市街地の大半が燃えた後、再建されたのが現在の「こまつ町家」。各地から呼び寄せた大工や職人が技を競い、大火の教訓を生かした小松独自の町家が一斉に建てられました。町をあげて町家保存に取り組む材木町界隈では、こまつ町家の特徴でもある袖壁（そでかべ）の銅板装飾や、二階壁面と下屋のおさまり部分に設けられた〝土板（どいた）〟のデザインにそれぞれ個性があり、なかなかのみものです。

大勢の観光客で賑わうお旅まつり。

さて旅のスタートは「こまつ曳山交流館みよっさ」から。毎年五月のお旅まつりの主役は、なんといっても八基の曳山と子供歌舞伎。二五〇年もの間、町民たちが大切に歴史を紡いできた文化遺産です。館内に常設展示された二基の曳山の絢爛さは堂々たるもの。小松の誇り高い町人文化をひしひしと感じます。

こまつ曳山交流館みよっさ
MAP[15 ページ①]
石川県小松市八日市町 72-3
TEL 0761-23-3413
営業時間／10:00 ～ 17:00
入館料／無料
定休日／無休 (12 ～ 3 月は水曜休館)

利常公ゆかりの茶舗

曳山八町のひとつ、龍助町にある「長保屋茶舗」は、北陸でも屈指の老舗。当主の長谷部英夫さんは一二代目にあたります。初代理右衛門は利常公の支援のもと、加賀藩で初めて茶の生産に成功した人物。自家焙煎の棒いり茶にファンが多く、お話をうかがっている間にもお客さんが何人も訪ねてきます。奥様が淹れて下さった棒いり茶の香りの、なんと芳ばしいこと。「加賀の棒茶は近年人気が出てきましたけど、このへんではずっと昔から親しまれてきたお茶なんですよね」と長谷部さんはにっこり。

昭和七年の大火の後に建てられた店舗は、市の「伝統的まちなみ景観向上事業」の補助を受けて改修し、趣ある姿に生まれ変わりました。カウンターも床板も、磨きなおしてそのまま使っているそう。木製の茶箱や古い水屋箪笥（みずやだんす）も良い味わいです。「街中の人の流れは減りました。吸引力のある店や場所があればと、町内会でもいろいろ考えとるんですが」。住民が減り、賑わいも薄れてゆく。それはどの地方都市も抱える悩み。しかし曳山のこととなると「祭りは頑張ってますよ。祭りやぞと号令をかければ、町外に出とる人も集まってきますしね」と力がこもります。時代が巡り、町を取り巻く環境は変わっても、曳山八町の心意気とプライドは脈々と受け継がれています。

長保屋茶舗をあとにして周辺を散策していると、本鍛冶町の正雲寺、別名〝猫の御坊〟の傍らに、なでると幸せになるという福石猫を発見。石に描かれた猫のゆるい表情と、地元商店会のユーモアに、ほっと心が和みました。

棒いり茶「加賀かほり」
200g 850 円

正面に掲げた茶壺は昔のまま。店内にはギャラリー「理右衛門庵」を併設しています。▶

長保屋茶舗
MAP[15 ページ②]
小松市龍助町 81-1
TEL 0761-22-1079
営業時間／9:00 ～ 19:00
定休日／不定休

猫の御坊商店会が設置した福石猫。幸せを招くと人気を集めています。

KOMATSU MACHIYA

郷土の味を守り継ぐ矜持

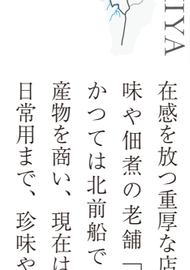
アーケードの中でひときわ存在感を放つ重厚な店構えは、珍味や佃煮の老舗「すみげん」。かつては北前船で運ばれた海産物を商い、現在は進物用から日常用まで、珍味や佃煮、糠漬けなど約二五〇種類の商品を取り扱います。大火後に建てられた店舗が現在の姿になったのは平成十二年のこと。「昭和五十年頃ですか、アーケードができた時に一度改装しているんです。吹き抜けを天井でふさいで、正面も近代的な感じにしてね。でもある時に、京都の町家で梁の見せ方なんかがすごくいいなと思いまして」と社長の角谷治男さん。改修後、老舗の風格を携えた建物は「こまつまちなみ景観賞」を受賞。往時の面影を伝えるとともに、北前船の時代から続く小松の食文化を守り継いでいます。

▲ 長男の亮さんご夫婦と一緒に。亮さんが考案したフグの子糠漬け入り「ふぐのこあいすくりいむ」が話題になっています。

アーケードの一画に、時が止まったかのような喫茶店がありました。昭和四十一年に開店した「泉」。マスター亡き後は奥様の和泉昌代さんが一人で店を守っています。しばしの間、常連さんと世間話。温かくて懐かしく、心地よいひとときでした。

いわしやにしんの糠漬け。熱々ごはんやお酒のおともにどうぞ。

すみげん MAP[15 ページ③]
小松市三日市町 9
TEL 0761-22-4214
営業時間／9:30 ～ 19:00
定休日／水曜



店内に飾られた絵画やオブジェ、そして、店のロゴなどは亡きマスターの作品。実に味わい深い雰囲気です。

平成の町家で夢を描く

西町には真新しい町家ができていました。「麓華洞」と名付けられた九谷焼の工房&ギャラリー。迎えてくれたのは陶芸家の楠野八艸さん。これまで床屋や陶芸店などさまざまな歴史を重ねてきた古い町家が、凝った意匠の建具、雪の結晶を描いた九谷焼タイルなど随所にこだわりを散りばめた平成の町家に生まれ変わりました。「この建物の歴史、住んでいた人の思いを大切にしたかったんです。そこに少し遊び心をプラスしました」と楠野さん。ギャラリーには、楠野さんと婚約者で陶芸家の林田光さんの作品が並びます。「将来は二人で絵具から作って、二人の色を生み出したいねって話しています」と顔を見合わせて笑う二人。伝統に敬意を払い、軽やかな感性をそこに上書きしてゆく。新たな伝統を作るのは、きっと彼らのような作り手なのでしょう。

▲ 楠野さんが制作した源氏物語の陶板。艶やかな彩色が印象的です。

楠野八艸さんと林田光さん。林田さんは結婚後、この工房に合流の予定。

麓華洞
MAP[15 ページ④]
小松市西町 97-5
TEL 0761-58-1619
営業時間／10:30 ～ 17:30
定休日／月曜
※ 2015 年からは絵付け体験教室を開始予定

KOMATSU MACHIYA

昭和初期の趣を残す町家

「とら屋陶器店」の開業は昭和七年。九谷焼の日展作家、打田幸生さんが現当主です。店を切り盛りするのは姪の喜多貴和さん。打田さんの作品をはじめ、普段使いの器や手ぬぐいなど、各地から取り寄せた良質な和雑貨が並びます。二階は昭和八年に建てられた当時の趣をそのまま残しており、希望すれば見学も可能。大正時代の襖絵、徳田八十吉や松本佐吉といった名工が描いた扇面屏風、朱壁に神代杉の天井という贅を凝らした座敷。「町家は間口に対して奥が長いので、こんなに空間が広がっているのかと驚かれる方も多いです」。外から想像もできないような深い空間が隠されているところにも、町家の魅力はあるのかもしれません。「この座敷でお茶会などもありますよ。月一回ヨガ教室もあるのでぜひ」と喜多さん。

▲ 質の良い手ぬぐいは使い道いろいろ。拭いたり、巻いたり、包んだり。実に万能なのです。

▲ 名工たちの手による扇面は文化財としても貴重。

とら屋陶器店の向かい、栗型の焼きまんじゅうが名物の「埴生万頭店」の店内でクレープを頬張る地元女子高生と出会いました。「小松が好き！」という彼女たちの屈託のない笑顔は最高。街の賑わいが薄れても、住民は街を愛し、あちこちで次世代の新しい感性と価値観がふつふつと泡のように湧き上がっています。「小松が好き」。旅の終わりに出会った言葉は、心に清々しい余韻を残しました。

とら屋陶器店
MAP[15 ページ⑤]
小松市東町 12
TEL 0761-22-0423
営業時間／10:00 ～ 18:00
定休日／水・日曜

埴生万頭店
MAP[15 ページ⑥]
小松市東町 14
TEL 0761-22-5034
営業時間／9:30 ～ 17:30
定休日／水曜

埴生万頭店の焼きまんじゅう 1 個 100 円。焼きたてを店内で味わうのもおすすめです。

こまつアグリリーダーズ vol.6

有限会社
ジャパンファーム
代表取締役社長
生水敏雄さん

小松市那谷町サ41番地
TEL：(0761)65-3308
http://jfarm.jp/
▷MAP［15ページ⑦］

小松市の中山間地域、那谷町で代々農業を営んできた農家の四代目として生まれた生水さん。昭和四十年、生水さんが高校三年生の時にお父さんが他界し、お母さんと二人で農業をするようになって、将来は合理的で大規模な農業を目指さないとダメだと感じていた。

法人化したのは平成元年。当時はまだ食糧管理法制度の下だったので、米を自由に売ることはできなかったが、将来は自分で丹精込めて作った米を直接消費者に届けたいという思いがあり、その思いに先行した法人化であった。

平成八年に食糧管理法が廃止される。生水さんは「食糧管理法が廃止になった時は、本当に嬉しかった」と言う。

山あいの田んぼの前で若い社員たちと。右から三番目が生水さん。

その後、人の紹介で東京の百貨店との取引が始まり、お客さんが少しずつ増えて来た。お客さんが増えると百貨店も喜んでくれ、そこからまた新しい百貨店との取引も生まれた。

生水さんの稲づくりは、いい土づくりから始まる。生ワラを肥料として鋤き込んだり、有機ボカシ肥料を用いて強い土壌を作る。そして、霊峰白山から流れ出る山あいの清流がお米を美味しくする。

ジャパンファームのお米のパッケージはとても個性的だ。生水さんの高校時代の美術の先生だった画家の宮田耕二さんが描いた山里の田んぼの風景や、生水さんのお母さん、藤子さん（今年で九四歳）を描いたもの。柔らかい筆使いで里山の風景や藤子さんの優しさが良く表現されている。この「藤子ばあちゃんのまごころ米」は特に好評で、「ばあちゃんの米をちょうだい」と注文が入るそうだ。

ここ十年ほどは香港の物産展に参加して、徐々に香港の富裕層にその味と品質が認知されるようになり、一昨年、昨年と三〇％ほどずつ売上が増えている。「五年ほど前から日本食、日本の食材への注目度がとても高まっている」と生水さん。将来は全収穫量の二割ほどは海外に輸出したいと言う。

今年の六月には以前からあった施設と道を挟んだ向かいにショップを開設した。自分たちで一生懸命作ったものをお客さんがどう反応してくれるか、自分で見たいという思いからだ。

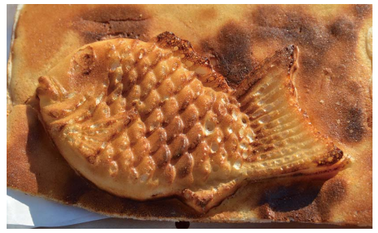
若い頃に描いた農業への思いを着実に実現してきた生水さん。米を一生懸命作って売るだけでなく、中山間地の作りにくい田んぼでも守っていかないといけない。地域を守ることも使命だと言う。

そのためには、色んな人に参加してもらい、アイディアを出してもらってもっとお客さんに喜んでもらえる米や餅などの加工商品を作って行きたいと今後の夢を語ってくれた。

大人気の「藤子ばあちゃんのまごころ米」。生水さんのお母さん、藤子おばあちゃんは現在94歳。91歳まで若い人たちと一緒に田んぼに出ていた。

---Editor's Choice---
編集部おすすめ情報

農家まりちゃんのベジフルたい焼
1日1000個も売れる超人気のたい焼き
こまつもんブランド認定商品


1個150円（税込）

漬物やジャムで知られるまるしょうさんの羽根付きのパリパリたい焼き。生地にはJA小松市が作る人参ピューレ入りで自然の甘みと香りが特徴。毎週金曜と土曜と日曜にJAあぐりで販売されているが、一日に一〇〇〇個も売れる超人気商品。JA小松市のトマトピューレを使用したトマト餡の他、五郎島金時や大納言小豆の餡もあって、他県から買いに来る常連さんもいる小松の名物となっている。

JAあぐりでの販売の様子。

有限会社まるしょう
▷MAP［15ページ⑧］
TEL:0761-21-9655
※JAあぐりでの販売はイベントなどで日程が変更となる場合もあるので、確実に買いたい場合は事前にお電話を。

クリエイティブディレクター / よねだみむね　チーフエディター / 高柳豊　エディター / 森井真規子　アートディレクター / 横山真紀　デザイナー / 長根尾勇太　スペシャルサンクス / 番作真奈美